

西夏文字の解説

吉池孝一

—

かつて、ポープという研究者が『古代文字解説の物語』という本の前文でこんなことを言った¹。「解説とは門を開くことであり、解釈とはその向こうにある広がりに関わることなのである」と。解説すなわち「門を開く」とは、未知の文字によって書かれた文を理解するための「手続き」そのものを発見しながら読み解くことであろう。そこで、この小論では、西夏文字の解説にとって当時の西夏文字の字典の解明と利用が最も重要な「手続き」であったと考えること、及びこの字典の解明と利用はロシア人のニコライ・ネフスキー²によってなされたということを確認してみたい。

さて、西夏文字は11世紀に西夏国で作られた文字である。西夏の初代皇帝の李元昊(リゲンウ)が、大臣の野利仁榮(ヤリジンエイ)らに作らせ西夏(1038~1227年)建国の直前1036年に公布したとされる³。これはチベット系の西夏語を記した表意文字であり⁴、文字を方形にまとめ縦に右から左に綴る点は漢字のような印象を与えるが、その文字要素は漢字とは似ていない。もっとも、文字要素を組み合わせて文字を作る方法は漢字を模したものとされる。

西夏は、1227年に、モンゴルのチンギス=ハンにより滅ぼされたが、その後この文字の使用例はあり⁵、最も遅いもので明代中期(1502年)まで降

¹ モーリス・W・M・ポープ著/唐須教光訳1982の「前文」7-8頁参照。

² ネ氏の生涯および西夏語研究との係わりについては加藤九祚1976に詳しい。なおニコライという名であるが、ローマ字表記ではNicholas(ニコラス)とする。

³ 『宋史』巻四百八十五「夏國上」に「元昊自制蕃書、命野利仁榮演繹之、成十二卷、字形體方整類八分、而書頗重複。……復改元大慶宋寶慶元年(1036)。」とある。「蕃書」とは西夏文字のことである。元昊が作り、野利仁榮に整えさせたとあるが、李錫厚・白濱・周峰2005『遼西夏金史研究』(福建人民出版社、125頁)にみえるように、元昊の主催の下、野利仁榮らによって作られたとするのが穏当であろう。

⁴ 西夏の国(1038-1227)は、現在の中国の西北であり、ちょうど東アジアと西アジアを結ぶ交通路の要衝にあたる。北はモンゴル語系の遼、西はトルコ語系のウイグル、東は中国語の北宋、南はチベット語系の吐蕃(トバン)に接している。西夏言葉はこの内、南に接するチベット語系の吐蕃の言葉と関係が深いということになる。

⁵ 元代の貨幣にパスパ文字、アラビア文字、西夏文字、不明文字が鑄込まれた所謂「四体字錢」がある。また、北京の西北郊外の居庸関に元の至正五年(1345年)築の過街塔と呼ばれる建築物がありその塔の内壁に西夏文字の文が刻まれている。さらに降って明代の弘

る。したがって、正式な国字としては 190 年余りに渡って使用され、西夏が滅んだ後も 275 年間は何らかの形で伝承されたことになる。西夏文字は 460 年余りという意外にも長い歴史を持つ文字である。

文字の認識。 この画数の多い奇妙な文字を、西夏国の文字であると正しく認識した記述は、管見によるかぎり、『吉金所見録』（道光七年・1827 年）が早い。これは古銭研究家の初尚齡が刊行した古銭の錢譜であり、西夏文字銭の模刻を収める。劉青園という人物の説を引用して⁶、正しく「西夏梵字銭」と注記した。その引用とは、涼州（今の甘肅省武威県）大雲寺中の碑文オモテの文字と古銭の文字が同じであること、碑文ウラに漢字漢文がありその中に西夏の年号である天祐民安所立とあることから、問題の文字が西夏文字と分かったというものである。ここで言及された碑文はいわゆる涼州の感通塔碑文⁷である。これが、張澍(チョウジユ)という中国人学者によって 1804 年に発見されたことは『養素堂文集』（序年道光十七・1837 年）巻十九「書西夏天祐民安碑後」にある⁸。

欧米人が西夏文字を正しく認識するのはこれより後のことであるが解読自体は、後述するように、欧米人によってその端緒が開かれた。

二

さて、表意文字は 1 字 1 字につき、その意味と音を解明していかなければならず、よほど条件が良くないと全面的な解読には至らない。甲骨文字の場合、後代の同系統の文字資料即ち漢字と比較しつつ読み解くことができたわけであるが、これは特殊なケースである。西夏文字の場合、同系統の文字資料というようなものはなかったが、解読にとって理想的な同時代資料が 2 種

治十五年(1502 年)の年号を持つ西夏文の石幢がある。以上の諸資料影印は史金波・白濱・呉峰雲 1988 にある。

⁶ 「劉青園曰、・・・嘗於涼州大雲寺、訪得古碑。陽面正作此等字。碑陰楷書、捫讀之、則天祐民安五年所立。乃知此錢爲西夏梵書。」(卷之十三第九頁)とある。

⁷ 「感応塔」とも称されるが、「感通塔」とすべきことについては長田夏樹 2006 に詳しい。

⁸ 『養素堂文集』（序年道光十七・1837 年。中国西北文献叢書による）に収められた「書西夏天祐民安碑後」に「此碑在我武威城内北隅清應寺中、・・・嘉慶甲子年・・・乍視字皆可識、熟視無一字可識。字體方整與今楷書無異。」「按史言、夏國字、係其臣野利仁榮所造、或元昊修之、未知其審。」とある。『養素堂文集』序年の 1837 年までにこの碑文を西夏文字と認識していたことは確かであるが、嘉慶甲子(1804 年)の碑石の発見時に西夏文字であることが分かっていたか否かについては明らかではない。なお、碑石の立てられた寺の名称を先の『吉金所見録』は大雲寺とするが、この記述は清応寺とする。長田夏樹 2006 によると清応寺が正しいようである。

類とも揃っていた。それは、①豊富な対音対訳資料と②西夏文字の字典である。そして、まずは対音対訳資料により研究の端緒が開かれた。

意味解明の端緒。最初に西夏文字の解明に着手したものとしては、バッシュェル 1895-1896 を挙げるのが適当であろう⁹。バッシュェル氏は、西夏語と漢語を併記した涼州感通塔碑文中の 37 の西夏文字に漢語を引きあて、その結果を手持ちの二種の西夏文字銭に応用し、一つは正しく読んだ¹⁰。バッシュェル氏の論文の中で注目すべきは、西夏語とチベット語との関係に言及したことである。感通塔碑文の西夏語碑文の中に、名詞の後に形容詞を置き、後から前の名詞を修飾しているものがあることを指摘しチベット語と同じ語順であるとした。

音解明の端緒。西夏文字の音の研究の始まりは居庸関の過街塔碑文の研究にみることができる。バッシュェル(1895)と同年に、『13-14 世紀のモンゴル文書』(1895 年)がヨーロッパで公刊された¹¹。この書物の中に、北京西北郊外の居庸関過街塔の西夏文字碑文の拓本とその音の引き当てが載っている。この碑文には、ちょうど万葉仮名のように、西夏文字の音を利用して梵語の陀羅尼を表記した部分があり、それを利用して西夏文字の音を推定した。これ以後、幾つかの対音対訳資料を用いた研究が進められ西夏文字の意味と音の情報は蓄えられていった。

資料の集成。1908 年、ロシアのコズロフ氏が率いる探検隊が、内蒙古の黒水城(ハラホト)の遺跡より、質量ともに申し分のない西夏文字の資料を発見した。これにより西夏文字解読の研究は大きく進み、期を画する書が 3 種出た。1 つは羅福萇の『西夏国書略説』(1914 年序)で、これは文法、音、語彙などを含む総合的な研究となっている。他の 2 種は字典形式のものである。1 つは羅福成の『西夏国書類編』(1915 年序)であり、「涼州感通塔碑文」「居庸関西夏文刻石」『西夏語訳法華経』『番漢合時掌中珠』を資料とした。この中の『番漢合時掌中珠』は西夏語と漢語の対訳語彙集で、コズロフの招来品である。いま 1 つは、ロシア人ニコライ・ネフスキー氏の『西夏文字抄覧』(1926 年)である。これは西夏文の仏教經典にチベット文字で発音を注記した資料の断片を整理したもので、これもコズロフ探検隊によって

⁹ 西田龍雄氏は『西夏王国の言語と文化』(東京:岩波書店、1997 年、p.351)のなかで、西夏文字の実質的な解読は Bushell (1895) に始まったとする。

¹⁰ 西夏銭は 2 種。1 つは正しく「大安宝銭」と読んだ。残念ながら、他方の「乾祐宝銭」は解読には至らなかった。

¹¹ Prince R.N.Bonaparte 1895。

もたらされた。

以上はいずれも対音対訳資料によるものであり、その本質は当て推量と言わざるを得ない。個々の西夏文字が対音対訳資料を持つか否かという点も偶然による。その点、もしも当時の西夏文字の字典があったならば、西夏文字西夏語の体系的な知識を得ることができる。幸運なことに、先のコズロフ探検隊の招来品の中に字典が含まれていた。

三

コズロフ探検隊の招来品の中には、西夏文字だけで書かれた西夏語の字典があった。『同音』と称されるものと、『文海』と称されるものの幾つかのバージョンである。この字典の構造を解明したのは、『西夏文字抄覧』（1926年）の著者ネフスキー氏であった。ネ氏は『西夏文字抄覧』の序文において、すでに『同音』と『文海』系字典に言及し重要な指摘もしたが、2つの字典を本格的に解明したのは“Concerning Tangut Dictionaries”（1930年）という僅か15頁の論文であった。いま、その概要を示し、ネ氏の仕事を確認すると次のようである。

『同音』。これは西夏語の発音字典であるが、簡潔な義注も付されている。ネ氏は、これまでの対音対訳資料によって知りえた音と意味を利用して、西夏文字だけによって成るこの字典の構成を解明した。ネ氏によると、『同音』は序、本文、後書からなる。本文は西夏文字の発音により先ず以下の九のグループに分けられ文字が収められるという¹²。

1. Heavy lip sounds (重唇音) —Labials
2. Light lip sounds (軽唇音) —Labial spirants
3. Tongue-point sounds (舌頭音) —Dentals
4. Over-tongue sounds (舌上音) —Palatals
5. Canine(-tooth) sounds (牙音) —Velars
6. Point-teeth sounds (齒頭音) —Dental alveolars
7. Real dental sounds (正齒音) —Palato-alveolars
8. Throat sounds (喉音) —Throat sounds
9. Aspirate sounds (風?音) —Liquids

この九つのグループは、日本語の五十音で言えば、カ行、サ行、タ行などのように、最初の子音の類似によってまとめられたものである。例えば最初の重唇音というのは p, b などではじまる音を、二番目の軽唇音は f, v などでは

¹² 「重唇音」から「風?音」までの漢字表記は N.Nevsky1926 の自序による。

まる音を、三番目の舌頭音は t, d などではまる音を一まとめにしたものである。

ネ氏によると『同音』は 56 葉からなり、1 ページは 7 行で、縦に右から左に進む。1 行に最大 8 つの大字があり、その下に小さな注字が割注（注記のため、1 行の中に小字を用いて二列で記したもの）として付されている。九つのグループの内、ネ氏は第 4 の舌上音のグループを含んだ第 20 葉の写真を紹介する。このグループは収録字数が最も少なく扱い易い。いま第 20 葉の右側の頁を横書きで示すと次のようである。第 1 行から第 6 行までが舌上音の解説と収録文字で、第 7 行目からは次の牙音が始まる。

なお割注の行変えは/で示す。/の左右のいずれかに字がない場合、そこは空白である。（ ）内はネ氏の英文による解説を漢字で表現したものである。

- 1 𪛗𪛘𪛙𪛚 (舌上音四品)
- 2 𪛛𪛜/ 𪛝𪛞/𪛟 𪛠𪛡/ 𪛢𪛣/𪛤 𪛥𪛦/𪛧 𪛨𪛩/𪛪 𪛫𪛬/𪛭 𪛮𪛯/𪛰
- 3 𪛱𪛲/ 𪛳𪛴/𪛵 𪛶𪛷/ 𪛸𪛹/ 𪛺𪛻/ 𪛼𪛽/𪛾 𪛿𪛠/𪛡
- 4 𪛢𪛣𪛤𪛥 (舌上音独字)
- 5 𪛦𪛧 𪛨𪛩/ 𪛪𪛫 𪛬𪛭/ 𪛮𪛯 𪛱𪛲/ 𪛴𪛵/𪛶
- 6 𪛗𪛘𪛙𪛚𪛛 𪛜𪛝𪛞𪛟/𪛠𪛡𪛢𪛣𪛤𪛥 (舌上音四品終 大字二十/注字二十一)
- 7 𪛦𪛧𪛨𪛩 (牙音五品)

意味の情報。さて、2 行 5 字目「𪛨 /𪛩」の割注「 /𪛩」は𪛨(霜)𪛩(露)という複合語を示し、2 行 7 字目「𪛫𪛬/ 」の割注「𪛬/ 」は「𪛬(善)𪛬(悪)」という複合語を示す。すなわち、ネ氏は空白部分に被注字を当てはめて複合語を指示するようになってきていることを明らかにした。このようにして、常用の複合語により被注字の意味を特定するものが大半であるが、2 字による特殊な注もあるという。すなわち、𪛱𪛲 (助語)、𪛳𪛴 (梵語)、𪛫𪛬 (人名)、𪛭𪛮 (地名)、𪛯𪛰 (不用) である。このうち「助語」は文法成分であることを示す。「不用」は創案されたが使用されなかった文字か、あるいは後に使用されなくなった文字であろうという。

音の情報。ネ氏はこの字典の中に、同じ音の文字のグループを発見した。おそらくこれが、『同音』に係わる最重要の発見であろう。第 2 行 4 字目「𪛢𪛣/𪛤」の○印は、同音の文字グループの区切れを示す。したがって、2 行目の 1 字目から 4 字目までの「𪛢、𪛣、𪛤、𪛥」、5 字目と 6 字目の「𪛨、𪛩」、7 字目と 8 字目の「𪛫、𪛬」などの文字は同音となる。ネ氏に

よると、このことは、対音対訳資料から知り得た西夏文字の音を代入してみても分かったもので、これによって、○印で囲まれた同音の文字の内、一字でもその音が分かれば他の全ての文字の音も分かるという。

更に別の重要な発見があった。それは第 4,5 行の独字である。資料の不足により確言することはできず「音声として孤立した諸文字がここに列挙されている」のであろうと見通しを立てた。

ネ氏による同音のグループと独字の発見は極めて重要である。なぜならば、『同音』はほぼ完本であったため、○印で区切られた部分と独字の部分を総合することにより、西夏語全体の音節の枠組みを知ることができるからである。

四

『文海』。『文海』は字形、意味、音の解説が付された総合的な字典である。『文海』、『文海雑類』、『文海宝韻』など幾つかのバージョンがあったが、ネ氏が扱うことのできたものは『文海雑類』であった。これは一部分(16 頁)しか残っていなかったが、この僅かな部分により、『文海雑類』の構造をほぼ解明し、その後の文海系字典の研究のさきがけとなった。

字典の構成。ネ氏は、僅か 16 頁の残葉であったが、その中にある見出し語に目をつけ字典の構成を明らかにした。

𐽀𐽁 (牙音) / 𐽀𐽁𐽂 (歯頭音) / [見出し語を含む頁は欠落] 喉音の字が並ぶ . . . / 𐽀𐽁𐽂𐽃 (風?舌歯音) / 𐽀𐽁 (上声) / [見出し語を含む頁は欠落] 正歯音の字が並ぶ . . . / 𐽀𐽁 (喉音) / 𐽀𐽁𐽂𐽃 (風?舌歯音)

見出し語の中に𐽀𐽁 (上声) とあることより、先ず文字は声調によって分類され、次いで『同音』と同様に音節初頭の子音によって下位分類されていることを明らかにした。そこに収められている個々の文字の下には小さな注字が割注として付されている。その注の構成も明らかにした。

注の構成。被注字は大字で、注字は割注として小さな字で 2 列に記されている。いま実例を横書きで示すと次のとおりである。なお、割注の行変えは/で示す。

𐽀𐽁𐽂𐽃/𐽀𐽁𐽂𐽃 𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄𐽅𐽆𐽇𐽋𐽍𐽎𐽏𐽐𐽈𐽉𐽊𐽌𐽑 (19 葉右 4~5 行目)

ネ氏によると、被注字の次の 4 字が字形の説明、次の 16 字が字義の説明、最後の 2 字が字音の説明となっている。

これを李範文氏の『夏漢字典』(1997)を参照して意味を付し、次いで日

本語に訳し、最後にネ氏による当時の解説を付すと次のようである。

①字形の説明部分。𦉰(頭) / 𦉱(脚)。「(被注字𦉰は) 𦉰の頭と𦉱の脚よりなる」。これをネ氏は“The head of 𦉰 (炭) ‘charcoal’ and the bottom of 𦉱 (?) .”と正しく読んでいる。なお、ネ氏は、字形の説明に用いられる8つの用語を明らかにした。1. 𦉰(頭)、これは漢字の冠に相当する。2. 𦉱(偏)。3. 𦉲(傍)。4. 𦉳(中)、これは文字の中央部分を指す。5. 𦉴(凡)、これは文字の上部から左側を指す。6. 𦉵(全)、これは文字の全体を指す。7. 𦉶(減)、これは一部を省略した文字を指す。8. 𦉷(脚)。

②字義の説明部分。𦉰(墨) 𦉱(は) 𦉲(文) 𦉳(字) 𦉴(書く) 𦉵(ところ) 𦉶(墨) 𦉷(を) / 𦉸(言う)。𦉹(また) 𦉰(炭) 𦉱(墨) 𦉲(を) 𦉳(も) 𦉴(言う) 𦉵(のである)。「𦉰は文字を書くところの墨を言う。また炭をも言うのである」。これをネ氏は“𦉰 is called ‘Chinese ink,’ with which we can write characters ;furthermore we call ‘charcoal’ by the same name.”と正しく読んでいる。

③字音の説明部分。ネ氏によると𦉰𦉱は中国の反切のようであり、前者の𦉰が声母(音節の初頭子音)を表わし、後者の𦉱が韻母(音節の声母以外の部分)を表わすことを明らかにした。

以上僅か1例であったが、ネフスキー氏による、字典中の西夏文字西夏語の読みは、大筋において現在と変わるところがない。

五

さて、未知の文字の解説に対音対訳資料は欠かせない。その未知の文字が表音文字である場合、対音対訳資料により糸口を掴み、劇的な解説の進展を見ることがある。一方、未知の文字が表意文字である場合、対音対訳資料を用いて1字1字に就き解説が進められる。表音文字の解説のような劇的な進展はふつう望めず、また対音対訳資料に拠る解説の本質は当て推量と言わざるを得ない。その点、当時の西夏文字西夏語の字典はそうではない。これを読み解くことができたならば、西夏文字と西夏語について、十全とはいわないまでも、確度の高い体系的な知識を比較的短期間に得ることができる。西夏文字にとって幸運なことに、このような字典が残されていた。この字典の解明と利用こそ、西夏文字解説にとって最重要の「手続き」であったと考える。幸運といえば、西夏文字にとっていまひとつ幸運が重なった。それはニコライ・ネフスキーという才能を得たことである。ネ氏は僅かな対音対訳資料により問題の字典をほぼ解明し“Concerning Tangut Dictionaries”(1930年)という小さな論文で公にした。これこそ西夏文字解説の手続きを示した

もので、解説史に於いて最大の転換点となった記念碑的論文であると私は信ずる。この論文媒体の発行は 1930 年であるが、論文末尾には「November 20th 1927」と記してあるから、1927 年 11 月は、西夏文字解説史にとって記念すべき日ということになる。しかしながら、西夏文字解説にとって決定的な意味を持つこの論文は、なぜかその後、それほど光が当てられることもなく今日に至っているように思う。

参考文献

- 長田夏樹 2006. 「西夏語資料略解—涼州感通塔碑の発見と造塔縁起」, 『東洋学術研究』第 45 巻第 2 号, 180-205 頁。
- 加藤九祚 1976. 『天の蛇——ニコライ・ネフスキーの生涯』, 東京: 河出書房新社。
- 西田龍雄 1997. 『西夏王国の言語と文化』, 東京: 岩波書店。
- モーリス・W・M・ポープ著/唐須教光訳 1982. 『古代文字解説の物語』, 東京: 新潮社。
- 史金波・白濱・呉峰雲 1988. 『西夏文物』, 北京: 文物出版社。
- 李範文編著 1997. 『夏漢字典』, 北京: 中国社会科学出版社。
- 李錫厚・白濱・周峰 2005. 『遼西夏金史研究』, 福建: 福建人民出版社。
- N.Nevsky 1926. 『西藏文字対照 西夏文字抄覧』, 大阪市: 大阪東洋学会。
- N.Nevsky 1930. Concerning Tangut Dictionaries, 『狩野教授還暦記念 支那学論集』: 27-41 頁+写真 2。東京・京都: 弘文堂書房。
- Prince R.N.Bonaparte 1895. *Documents de l'époque mongole des XIII^e et XIV^e siècles. Inscriptions en six langues de la porte de Kiu-yong Koan, près Pékin: lettres, s'èles et monnaies en écritures ouïgoure et 'Phags-pa dont les originaux ou les estampages existent en France* (Paris, 1895).
- S.W.Bushell 1895-1896. 'The Hsihsia dynasty of Tangut, their money and peculiar script' *Journal of the North China Branch of the Royal Asiatic Society*. Vol. X X X, 1895-1896.